

平成26年度 長期モニタリング計画 モニタリング項目

資料5-1

(評価者：河川工作物AP)

モニタリング項目	No. 18 淡水魚類の生息状況、特に知床の淡水魚類相を特徴付けるオシヨロコマの生息状況（外来種侵入状況調査含む）		
モニタリング実施主体	林野庁		
対応する評価項目	III. 遺産登録時の生物多様性が維持されていること。 V. 河川工作物による影響が軽減されるなど、サケ科魚類の再生産が可能な河川生態系が維持されていること。 VIII. 気候変動の影響もしくは影響の予兆を早期に把握できること。		
モニタリング手法	イワウベツ川等において、魚類相、河川残留型オシヨロコマの生息数及び水温変化を把握。		
評価指標	オシヨロコマの生息数、外来種の生息情報、水温		
評価基準	資源量が維持されていること。 外来種は、根絶、生息個体数の最小化。 夏季の水温が長期的にみて上昇しないこと。		
評価	<input type="checkbox"/> 評価基準に適合		<input type="checkbox"/> 評価基準に非適合
	<input type="checkbox"/> 改善	<input type="checkbox"/> 現状維持	<input type="checkbox"/> 悪化
	(1) 水温 ・調査対象 36 河川のうち 8 月の平均水温について、オシヨロコマの採餌活性が低下する 16℃に達する河川は 8 河川あった（遺産内は 2 河川）。2000 年以降の調査結果からは明確な水温上昇は読み取れない。 ・一方、斜里側の 4 河川（うち遺産内は 1 河川）では、最高水温がオシヨロコマの生息に負の影響が及ぶとされる 20℃を上回る日があった。 (2) オシヨロコマ ・魚類調査対象とした 8 河川のうち 6 河川（うち遺産内 2 河川）でオシヨロコマの生息が確認された。過去の調査結果（2002 谷口ら）と比較したところ、ルサ川（遺産内）、チャラセナイ川、オッカバケ川（ともに遺産外）の 3 河川では生息密度の増加傾向が見られた。 ・一方、遺産外のオシヨパオマブ川は、過去の調査と同様に採捕されなかった。同じく遺産地域外のフンベ川とオシヨコマナイ川では、過去には低密度ながら採捕されていたが、極端な密度減少が見られた。この 2 河川は、過去の調査では幅広い年級群（尾叉長）が確認されていた河川であった。オシヨコマナイ川については、8 月の平均水温が 16℃に達する。 ・これら遺産外の 3 河川は、河畔林の鬱閉度を示す植被度が低いこと、平均水深や平均流量が少ないなどの特徴がみられた。 (3) その他の魚種 ・ルサ川（遺産内）とマツノリ川（遺産外）でカンキョウカジカとシマウキゴリが確認されたが、ニジマスは 8 河川すべてで確認されなかった。 ・一方、ニジマスの集中調査を行った 2 河川（ともに遺産外）のうち、チニシベツ川では繁殖が続いていることが確認された、これは過去にニジ		

平成26年度 長期モニタリング計画 モニタリング項目

	<p>マスを放流し繁殖場所として利用されていると考えられる。 シマトツカリ川では一昨年度の試験駆除が繁殖を抑制した可能性も示唆された。</p> <p>なお、全体評価（上記チェックボックス）は、対象37河川すべての魚類調査が終わる29年度を待って行うこととする。</p>
<p>今後の方針</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・次年度は、水温調査を引き続き37河川（うち遺産地域内17河川）で、魚類生息調査を8河川（うち遺産地域内6河川）で実施し、水温の上昇傾向にある河川について注視していく。 また、調査対象河川が過去にどのような人為が加えられたかの整理も図る。 ・ニジマスの集中調査についても、引き続き研究者が主体となってシマトツカリ川とチニシベツ川において実施する。